

前に進む「仕合わせ」

上 廣 哲 治
うえ ひろ てる じ

今月は、会友の皆さんにかぎらず、誰もが手にしたいと願っている「仕合わせ」について考えます。あるお母さんの話です。小学生の息子さんが、会誌の中の「仕合わせ」という文字を指して、「これもシアワセって読むんでしょ」と得意げに話しかけてきたそうです。息子の成長がうれしくて褒めたところ、続いて「この『仕合わせ』とふつうの『幸せ』はどう違うの」と聞かれたということです。なかなか鋭い質問です。皆さんならどのように教えてあげますか。

「幸せ」も「仕合わせ」も、辞書には「めぐりあわせがよいこと」とあって、意味の違いはありません。しかしわが会では、「幸せ」と書かずに「仕合わせ」と書いています。なぜでしょうか。『実践倫理講座・天の巻』の「幸福」の項目には、次のようにあります。「人と共に幸福になつていくという考え方から、実践倫理では、『幸せ』を『仕合わせ（仕え合う仕合わせ）』と表記しているのです」

なぜ「仕合わせ」と書くのかは、この説明で尽くされております。けれども、教えを具体的な実践に結びつけるため、もう少し考えを進めましょう。

この夏は、リオのオリンピック・パラリンピックに沸いて暑さも一入ひとしほでしたが、皆さんは岩崎恭子さんという競泳の選手を覚えておられるでしょうか。一九九二年のバルセロナ五輪と、四年後のアトランタ五輪の平泳ぎに出場した選手です。岩崎さんは、両大会を経験する中で、性質の異なる二つのシアワセを体験しています。

彼女はバルセロナ五輪で、平泳ぎの日本代表になりましたが、メダル獲得の期待は自由形の千葉選手に集まっていました。岩崎さん自身、「決勝に進めればいいほうだと思ふ」と語っていたほどです。しかし、二〇〇メートル平泳ぎの決勝に進むと、予想に反して最後の五〇メートルで当時の世界記録を持つアメリカの選手や、中国の強豪選手を抜いて、なんと二分二十六秒六五というオリンピック新記録で優勝してしまったのです。金メダル獲得を示す電光掲示板を見て、「うれしいというより、びっくりした」と彼女は語っています。

「今まで生きてきた中で、いちばん幸せです」。のちに流行語となる言葉が飛び出したのは、レース直後のインタビューにおいてでした。彼女はそれまで、一日九〇〇メートル以上も泳ぐ練習に泣きながら耐えてきました。辛い練習でしたが、泳ぐことは楽しかったそうです。その辛くもあり、楽しくもあった練習の果ての言葉です。十四歳になったばかりの少女の心の、自然な表現だったのでしょう。

しかし帰国すると、思わぬ試練が待ち受けていました。出発時に無名だった少女は、一躍、国民的ヒーローになっていたので。マスメディアへの出演は、中学二年生にとって戸惑うことばかりでした。どこへ行っても、金メダルと「今まで生きてきた中で……」の言葉が付いて回ります。

彼女は悩みました。しかし練習を休むわけにはいきません。ところがいくら練習しても、記録は思うように伸びないのです。スランプです。すると一転、マスコミや世間は、思うように記録が伸びない彼

女へのバッシングを始めました。彼女はそれでも、「私は人に何か言われるために、水泳をやってきたのではない」と割り切って練習に集中し、周りの人たちにも支えられて、アトランタ五輪出場の切符も手にしたのです。

結果は、残念ながら平泳ぎ二〇〇メートルは十位、一〇〇メートルは予選落ちに終わりました。後日、彼女はインタビュに答えて次のように語っています。「アトランタの結果は、私の人生の中で、バルセロナの金メダルに等しいものでした」と。すると意地の悪い記者が、バルセロナのときとどちらが幸せですか、と質問してきたのです。彼女は、「幸せに順位をつけることはできません、今はふだんの生活の中で、周りの人たちに恵まれて楽しく暮らしていることが幸せです」と、返しました。

ここには、性質の異なる二つのシアワセがあります。いわば、十四歳で味わった優勝の「幸せ」と、十八歳で得た十位の「仕合わせ」です。バルセロナでの「幸せ」は、金メダルがとれた喜びが大きかったでしょう。好運にも恵まれた「幸せ」でした。一方、アトランタ後の「仕合わせ」は、運とかに拠らない、周りの人に支えられた心の「仕合わせ」だったのです。また、こうも言えるでしょう。バルセロナでの「幸せ」は、誰もが体験できるわけではない名誉な幸せで、アトランタ後の「仕合わせ」は、私たちでも手にすることのできる仕合わせだった、と。

人は一人で生きてゆくことはできません。いま自分が生きていられるのは、自分の周りや知らない人たちに、生活のさまざまな部分を支えてもらっているからです。だからこそ私たちは、周りの人にあたたかく見守られ、支えられて暮らす、穏やかで満ち足りた仕合わせを感じるのです。

岩崎さんは二年後、体調不良もあって二十歳で現役を引退。子どもの水泳指導法を学ぶため、アメリカに留学します。支えられた仕合わせから、支える側の仕合わせに一步踏み出したのです。彼女の「仕合わせ」は、十四歳のときにはわからなかった周囲の「お蔭さま」を知ること、広がりと深さを増していったのです。わが会流に言えば、人として大きく成長した岩崎さんは、子どもたちに水泳の楽しさを教え、子育てに励む中で、「我も人も仕合わせ」に向かつて、しつかり水をとらえて前に進んでいったのです。

繰り返します。わが会で「幸せ」を「仕合わせ」と表すのは、周りの人々と互いに仕え合い共に仕合わせになろう、という考えからです。真の仕合わせは、「我も人も仕合わせ」の中にしかないと考えるからです。

では、どうしたらその「仕合わせ」を感じることができるのでしょうか。その秘訣は、「テイク（求める）」ではなく「ギブ（与える）」の精神にあります。人に「求める心」を減らして、「与える心」を増やしていくのです。それを義務感からではなく、自らすすんで楽しく実践するのです。そうすれば自然に、人からされて嫌だったことは人にしなくなるはずで、「人からされてうれしかったことだけを人にする」。そして「してあげたことを忘れる」。これを意識改革の一つとして提案したいと思います。人は、してあげたことは小さなことまでよく覚えていてくれるものです。それに比べて、してもらったことはじきに忘れてしまうのです。人間関係の軋轢の多くは、このアンバランスから生まれるのです。

求める心にはキリがありません。この際、してあげたことはすべて忘れてしましましょう。これが「仕合わせ」を実現させるための心の構えだと思えます。

なぜならば、「見返りを求めない実践」こそ、倫理実践の原点であり、神髄だからです。